

矢島祐利歌集

昭和二十一年（一九四六）アブラギギ四月号

ふるさとのお母がまじたる栗餅をともこみ喰く
ふるさとと菓子と

ふるさとのお越名^{こゑ}の沼の寒鮎を食らう
思ふ赤彦先生

生ひ立ちの此の國土くにつちは狭くとも樂しく生くる道はあるべし

歸り来てふるさとの山親しけれ紅葉は過ぎしあらくさの色

木枯しは今日もひねもす吹きにけり切きときもかくてありにし

西風の吹きすそふ夜を老いし母と雜炊を食ふ幾年ぶりぞ

つつがなく歸り来しかば老い母は吾の背中を洗ひたまへり

京城に置き来て来にけり本のこと思ふもあはれ夜半に目覚めて

昭和二十二年（一九四七）

アララギ 三月号

引揚^書げの吾の願ひは多からず机を置かむ
一坪の場所

此の日びろ時間を賣りて勤むると吾が言
ひしとき友笑ひにき、

友は五味保義君なり

ほかほかとステイム通る部屋にゐて心足れり
といふにはあらざる

G H Q 勤務

外國^{ぐわいこく}の言葉^{ことば}ふびくを気にもせず吾の席
にてほしいすまはあり

此のびろのわが樂こしけは午了ぎて外の空気を
吸ひに行くと

勤めびとぞろぞろ歩くひろどきをまよも混りて
まぐはぬ如し

或るときは電車に乗りて古本を見に行くと
もあり午の休みに

時間オことやかましく言ふも尤も存れど夕
べは早く帰りたく思ふ

腹へりて吾があるときは山川の清きに遊ぶ心
湧きたり

○

助手安部讓治君を悲む

アフラギ八月号

ミンダナオ島スリカナといふ^を地図に見つ^{いくさ}戦の
様は思ふよりが厚し

亡骸は如何にふりけむ、
靈靈とどのまやか
しものは焼きも古葉となむ

世見ひたるこぶしの花を供へむに君が字真の
一枚も存し

才存ほなる君なりしかば
吾と共に朝鮮に行
きて働きはけり

朝鮮より南方に行きて還
らねばその父のため
吾は悲しむ

出で立ちの昔前夜なり
おそろくなり吾の家
はて髪刈りてやりき

アララギ八月号

みちゆくより君が忌明の茶を貰ひ朝夕
すする君を偲んで

と真面目なる青年なりき大草には入りたき望
みが身へてやりたかりき

昔と共に調べし事も途中にて再び行きつひ
に還ららず

わが心慰さずかぬつや藤の花咲きたる頃と園に
入りつゝも

六月のくもりつがれば幼な子の疫癘は逝きし
年を思ふも

おもかげは十とせの今も軽々と膝に抱きし
六歳にして

ケノクニ六月一週年記念号

下つ毛は吾のふるさと
爽々青く雲雀あがれる
頃かも今は

道のべに白き花
瓣の散り敷くに
何ぞこみたり
こぶしの大木

しらじらと野末の村に咲く花は
李の花が薄青
くして

さくうばを松の木の間は
さく見れば狭く汚き
に日本おもはゆ

引揚げて来し國土に
ふたむきを櫻の咲けり時
にたりけり

昭和二十三年（一九四八）

木犀の花

八雲 二月号

狭き家にござたござたとして棲み居れど木犀咲
けば季節を感じず

勤めより疲れて帰る夕暮は木犀の香は
心しむもの

明りのつかぬ家にかへり来て木犀の香に立ち
来ればわれは休らふ

買ひこ本世買ひこ本のやうやくにニートルはが
りになりにけり

明日は何を食はずはやあらむ夜ふけて厨に
書はひとりごちつ

志津の原

夏休みどころにも行かぬ兒らを連れ秋草花の
野に遊ぶとむ

子供らはオーケーと直ぐに言ふ此の移
り行きも見遇と難し

此の原は練兵場の跡とれは人も見なくは秋
更けむとす

廣原の中に小さき家立つは^引揚びとの假屋な

うし

予らがきく草花の名をわれ知りては秋
草と言ふべかりけり

関東水害

出水は家に到らざると下より来ぬ汽車に之し
より思ひきわれは

渡良瀬に近ければ思ひき。わが家に老いし母あり水やつきしと

明治四十三年なりき。わが村もいふく水つき。苦しみはけり

電車より見て通る水つきし家のさまあはれとや言はむ原始とや言はむ

開門を調節して水防ぐ國もありいふく自然に才をほふる國もあり

○

九十九里・東良見

アフリガ 三月号

打ち穿つる波の形の変り行く見つしあはれは吾等飽かす

拾ひ来る貝の種類も盡きれば松の林に歩
み下り行かむ

望移は用ゑく存りて立ちにけり光しけらに寂
しき冬演

此の演は事やあらむと騒おはし思ひも遠く海
の静けし

○

アララギ 六月号

ほしけやし甲斐の國より訪ぬ来し亡き子
の友の処女となりて

映画館出い来しとき雨となり春がけなり
のとどろきけり

花を捨て静かに居れる櫻土手行きつと思ふ
過ぎにこの世を

ぬか机縁とせぶりに置くくるむ煙草を吸
ひて夜を更かしめる

春の風硝子戸中下り一日吹りど机を置く
に心落ち着く

昭和二十四年（一九四九）

ケノクニ六A号

朝の飯下りば仕事につかむとすか互しき思ふ
をゆうべ見つれど

信濃路はよむ寒からむ蓼科や諏訪の湖へを
あれは思ふも

湖への墓にしばらく参らぬを思ひつつ居り
息日近づき

三とせ餘りに六たび所を易へて位む此処にい
つまで在りと思へや

をきよらはいささかの土を耕してくさぐさ
の種~~子~~をサ時きこあるはや

○

アララギ十一月号

逝きし子の忌日近づく梅雨ぐもり心重たき時
は巡り来

八月二十七日諏訪行

思ひおこしを墓べに來て心しなし湖を見下ろす
おくつきどころ

薺りの日湖のかがやき眼に沁み思ひかへり来
湖を見れば

薺り果てて諸共に浴みし諏訪の湯に子供をつ
れて今日を来にけり

壬午
泉野の追悼会にもろびとと撮りに写真も
失ひにけり

昭和二十六年（一九五二）

アララギ 九月号

バルコンに吹き入る風の涼しくもマニラの朝
に果汁をたたふ

飛行機の中にねむり目さむればシリアラ國
は朝の日射せり

アルパスもしまうくはして遅ぎしかば緑傾くス
イスの草原

○

一九五〇年渡欧中の日記から

マドンナはいくたりの人招きはりむやうしきか
をやフラ、アンジエクワ アムステルダム美術館

右一首「オランダ日記」(圖書新聞)廿六年一月
十(一)

○

以下の歌は掲載されず

昭和二十五年八月十一日空路ヨーロッパに向ふ

たたかひの映画思はず香港の土ありはなす山
肌を見つ

空の中は印度の國も涼しかり低くぞ見ゆる白
き綿雲

カルカッタ

スコールの邊ぞしばかりの飛行場に印度の人ら
草刈りて居り

色黒きこの國人の親こりれねもごろにわれに
食をすすむる

カラチ

夜深く降り立ちて入る休みどころ蠅を追ひつゝ
熱き茶を呑む

地中海

遠き島は雲いとまがふこの形容は平凡なれど
現実にして

ここにして古き歴史も思はゆるギリシアの方
にたをびける雲

ひろいひにマカロニあればやがて着くローマの
國のおもほゆるかな

イタリアのローマの街の石だんや坂多くて
長崎おもしろ

イタリアは松の木がありしかすがに日本の松と
少しながへり

アルプスを越ゆ

谷あひに雪のつもれる山ありて峻き峰のつら
なれる見ゆ

目の下に青き湖美しきスイスの國の青き山
どうみ

示さるる鋭き山はマッターホーンにちまろにし
て遠のきにけり

アルプスもしまらくにして過ぎしかば緑傾く
スイスの草原

山を過ぎて高度下がれば草原に遊ぶ畜群の
動くさへ見ゆ

屋根甜々、家まぼろなるは牧舎ほりむ青々とし
廣きアルプに

ローマ所見

酒を呑み肉食をする西洋僧脂ぎりたる顔を
してをり

何故に祭心したる尼をらむ美しき、瞳に美しき、
聲

カムポ・デイ・フィオーレ

そのかたに君が焚かれし跡どころ花の廣場にわ
れは来にけり

長き空白ありて

昭和五十五年（一九八〇）

○印 アララギ二月号

豊後雑詠

○日出の海見おろす山の中どころ帆足万里の
おくつきに詠ぶ

○大正十五年万里全集出でしとき買ひたかり
しが能はざりけり

二子山今日ぞ見ゆけり古くより名ありは知りし
くらさきの山

○三浦梅園帆足萬里のくに手ればわれは豊後を
親しく思ふま 里吉は万里の幼名

梅園は里吉の師のまた師にて二人はつひに相見
やうらし

日出の海あるいは菡萏かんたんの海といふ城下しろした鱧がれしほこ
の名物

君が家にふたたび宿りかんたんの鱧食はむと
わが思はなほ

○五月十三日雨降りしかば伴はれ府内の町に本
をあらせりま

○アルメイダ遠く来りてつとめしをこの國人は
書きて残さず

思出は昨日のごとくあざやけきいく子の髪は
白きもく見ゆ

○

○印アララギ四月号

この日ごろまなこいたはり多く讀まざる古きこ
とをど思ひ出さ居り

○われ若く讀者輕視といぶかりし即興詩人の文
字の大キキヤ

○母のため四号活字使はせし鴉外の心いんらか
理解せり

長崎に三たび来りて今日は見らる原爆ののちに
榮やのさかまを

○三浦梅園長崎に来て動揺せり通詞が語る
地動の説に

梅園は二度長崎に來りしが地動の説は二度目
にききき

赤水を汽車過ぐるとき思ひ出づ阿蘇のふもと
に夏安居ありき

安居會終りのときは追いつきて土屋先生に笑
はれにけり

○思出は心の中には保つもの言に出たこと悔や
ことあり

デュヴィヴィエはこの心境を描きたりカルネ
ド・バル即舞会の手帖

○

○印アララギ五月号

○わが庭の氷れる池に下り立ちし白鷺はすぐに
飛び去りにけり

○あゝ鷺は水呑所に来しがさにあらうじ夏に金魚
もぬらひし奴らし

空とびて池の金魚を見つけたる鷺の眼力とも
しきまどには

○日の暮はまをこ疲れてしばばたき植木を友と
ずるにもあらうぞ

十とせ前早生に行きし思ひ出し黒生の海を見た
くをりたり。

海原の遠くを見るぞ樂こけれまなこ休まり肩
もほぐろる

雲と海^波がめて居れば飽かずかも形も色もその
都度あらうし

二階より海を描かむと宿求め一人は泊りぬとこと
われけり

まはるより宴會をする海宿にかるる人を泊
めつものが

人居るぬ冬の浜辺に佇めて波の形を記憶に
とどむ



昭和五十五年四月六日千景アラヤギ歌會 詠草

オリンピックはシヨーがサーカスがわれ知りず
アテナイびとは何と見うらむ

いにしへにオリンピアの野を走りしは金のメ
ダルのためにはあらず

右詠草の在りの草稿のうち一首

民族の祭典といふはいまだよしデモンストレーション
のほき違へなり

○

偶感

夢にむに忘れぬ人もあらずくはいまはの際に
誰が名呼ぶらむ

○

○印アテラギ八月号

○「この奥に浅間あるべしヤコフき雨」俳句にて
無理かも知れぬ

○落葉松の芽ぶきけぼりて降る雨は小鳥の声も
今日に聞こえず

この宿に鳥の録音ありといへどテープを聞くは
学習のどとこし

ここの湯は夏を過ごせし人ありてすでに久し
と思ふばかりに

○雨はれし鬼押出しの岩の上地質をまねぶおのが
子と居り

○サラティンはイスラムなれば十字架のフラインク
びとと戦ひにけり

○戦争は好む所はありずもスルタンをればあはれ
サラティン

パレスチナ十字軍より取返しマドラスなどを
作らせにけり

マドラスは西洋ふらぶコレジオオムイスラム学
ヲ殿堂あり

スコットのタリスマン讀ハシは震災前イスラ
ムウキは余り知らざりキ

昭和五十六年（一九八二）

○印アララギ二月号

一九八〇年十一月二十六日 田山縣玉島田通寺なる田代芳郎の墓に詣
の戒名は要らぬと言ひし君が墓をひそくありぬこ
このみ寺に

○田代芳郎アララギにては村松芳郎もりまつは
君がふるさとにして

村松が田代をさるとわれ知らず共に物理に入
りにしころは

○村松はわれより先に赤彦に就きわれより先に
みまかりにけり

○越人の良寛和尚をうやまひて玉島田通寺に
墓を設けし

玉島は東國よりは程遠し君がうかうも繁くは
來ざらむ

瀬戸の海のどがなれども水島の工業地帯はあじ
鼻のヤコキ

わが友の墓に詣づる望み果し吾備路の秋も少し
見むとす

秀吉が水攻めせしはと
名も高き、高松城跡址小
かりけり

日本一最上稲荷の大鳥居高さ二十八メートル